

◇ 修士論文要旨 ◇
(昭和55年3月卒業生)

「紬」産地の比較分析に関する一試論

— 村山産地と結城産地の場合 —

磯 前 厚 子

本研究の目的は、従来、地理学の論文においては、とり扱われてこなかった、日本全体の「紬」産地について把握し、また韓国との関係もつかみ、さらに、同じ関東地方にありながら、かなり違った性格を有すると思われる「村山産地」と「結城産地」の比較分析を試みることによって、それぞれの特色と相違点を明らかにすることである。なお、本論文における村山産地とは、村山大島紬の生産の中心地である西多摩郡瑞穂町及び武蔵村山市をさし、結城産地とは、結城紬の生産の中心地である結城市をさすこととする。

論文は、第I章から第V章までであり、第I章は「紬」と題し、まず、私なりの「紬」の定義を述べ、次にその原料である糸についてのべ、それから生糸の需給状況について日本と外国とに分けて分析した。そして、日本の紬産業に深く関わりをもつ韓国の紬産業について1節を設け、近況を分析、考察した。その後、日本では現在、どのような場所で紬が織られているのかを調べ、現在の生産地は、東北・関東・甲信越の東日本に集中し、西日本では沖縄がめだっていることを把握した。日本の紬産地及び、その位置は表1及び図1のごとくである。これらの生産地の中には、古くから伝統的に織られている所もあれば、論文中に詳しく述べたように近年の「手づくりの味」ブームによって新しく「紬」を織り出した所もある。それらは、同じ「紬」という名称であっても、原料の糸や、織機の種類、また染色の方法などもかなり異なっており、現在の「紬」がいかに多様化しているかがわかる。本来ならば、地図上に、伝統的地域と、新興地域とを区別すれば、考察はさらに深まると思われたが、昔織っていたが一たん中止し、近年再び織るようになった地域もあれば、毛織物では伝統的であっても、「紬」は、その技術を生かしながら新しく織りだした地域もあるし、その他様々な地域があり、伝統的地域と新興地との区別は困難であるため、地図上には表わせなかった。しかし、もし、はっきりと伝統的産地をつかむことができるのであれば、どのような要因のもとに現在まで生産地として残っているのかを考察したかった。その場合も、何をもって「伝統的」というかを定義しなければならず、困難ではあるが今後の課題としたい。

さて、論文では、その後、日本における村山産地と結城産地の位置づけを、紬生産額によって位置づけてみた。それが表II及び図IIである。この表や図によって、結城紬は全国第2位、村山大島紬は全国第4位であることがわかり、両者とも生産額からみると、全国で、かなり上位であることが判明した。

以上が第I章であり、「紬」を、多方面から分析した後、第II章では、論文の研究地域である西多

表I 紬生産者名簿 (昭和50年3月)

地方	番号	名称	住所	生産者名
東 北 地 方	1	南部 紬	岩手県下関伊那岩泉町上宿	八重樫フジ・フキ
	2	花泉南部紬	岩手県西磐井郡花泉町涌津字新町11	小野寺信平
	3	紅染手紬	山形県米沢市松が岬2丁目3	新田秀次
	4	紅花 紬	〃 〃 中央5丁目2-104	猪俣市弥
	5	栗虫 紬	〃 〃 直江町10-5	小島織物
	6	みちのく 紫根染紬	〃 〃 門東町1丁目1-16	みちのく紫根染同好会
	7	摩耶 せんまい紬	〃 西田川郡温海町関川	山村はた織組合
	8	長井 紬	〃 長井市宮十目町	長井紬織物協同組合
	9	羽前 紬	〃 〃	〃
	10	福島つむぎ	福島県福島市瀬の上穴田14	阿部つむぎ工房
	11	小浜つむぎ	〃 安達郡岩代町小浜	農家
関 東 地 方	12	結城 紬	茨城県結城市・栃木県小山市	本場結城紬技術保存会
	13	石下 紬	〃 結城郡石下町	茨城県結城郡織物協同組合
	14	豊田 紬	〃 〃	〃
	15	筑波 紬	〃 〃	〃
	16	絹田 紬	〃 〃	〃
	17	鳶八丈 紬	東京都八丈町中之郷	山下ゆめ 他
	18	黒八丈 紬	〃 〃	〃
	19	八丈白 紬	〃 〃	〃
	20	村山大島 紬	〃 武蔵村山市中藤4254	村山織物協同組合
	21	真綿染 紬	埼玉県秩父市黒谷1463	逸見忠重
中 部 地 方	22	栃尾 紬	新潟県栃尾市新町	風善織物
	23	小千谷 紬	〃 小千谷市土川94	小千谷織物同業協同組合
	24	十日町 紬	〃 十日町市本町西3丁目	十日町織物工業協同組合
	25	古代 紬	〃 南魚沼郡六日町25-6	林宗平
	26	六条 ゆきやま 紬	〃 〃 塩沢町	塩沢ゆきやま紬同人会
	27	甲斐絹 紬	山梨県北都留郡上野原町1636	上野原織物工業協同組合
	28	甲州唐糸 紬	〃 塩山市熊野428	望月清司
	29	信州 紬	長野県松本市野溝1234	信州手織紬組合
	30	天蚕 紬	〃 〃 清水町西1434	本郷大二 他
	31	上田 紬	〃 上田市上塩尻40	小岩井勉 他
	32	伊那 紬	〃 駒ヶ根市国	久保田織染 他
	33	飯田 紬	〃 飯田市鼎町竜口良三方	飯田紬研究会 他

中部地方	34	施紬・紺紬	長野県岡谷市加茂町3-2-21	岡谷ゴブラン工芸織物
	35	ふとり糸紬	〃 〃	〃
	36	柞蚕紬	〃 〃	〃
	37	桑山紬	〃 西砺波郡福光町法林寺308	高坂制立
	38	能州紬	石川県鳳至郡門前町中谷内	農家賃織
	39	白山紬	〃 河北郡津幡町庄4の108	金紡産業 他
	40	牛首紬	〃 石川郡白峰村桑島	西山産業 他
	41	ざざんざ織	静岡県浜松市中島町797	平松 実
近畿地方	42	郡上紬	岐阜県郡上郡八幡町初音	宇慶力三
	43	浜 紬	滋賀県長浜市平方町745	浜縮緬工業協同組合
	44	秦 荘 紬	〃 愛知郡秦荘町中島	川口織物
	45	日枝つむぎ	〃 大津市坂本本町	松井浄蓮
	46	紬(各種)	京都府京都市上京区今出川通大宮東入	西陣織物工業組合
中国地方	47	島 山 紬	〃 綾部市本宮1	出口直美
	48	いづも織	島根県安来市	青戸由美江
九州地方	49	琉球古典紬	宮崎県宮崎市阿波岐原町江田原1600	秋山絹織
	50	綾の手紬	〃 諸県郡綾町古城	綾の手紬工房
	51	恵利蚕紬	〃 〃	〃
	52	本場大島紬	鹿児島県鹿児島市宇宿町185	鹿児島県織物工業協同組合
	53	〃	〃 名瀬市幸町	本場奄美大島紬協同組合
	54	ロートン織紬	沖縄県那覇市首里汀良町1-30	宮平初子
	55	首里花織紬	〃 〃 儀保町4-79	大城志津子
	56	琉球 紬	〃 〃 当蔵町2-8首里工芸指導所内	浦崎康賢
	57	琉球 南風原紬	〃 島尻郡南風原村喜屋武6	大城カメ 他
	58	久米島紬	〃 〃 仲里村比嘉2866	仲里村久米島紬事業協同組合
	59	宮古 紬	〃 平良市下里615	砂川玄恒

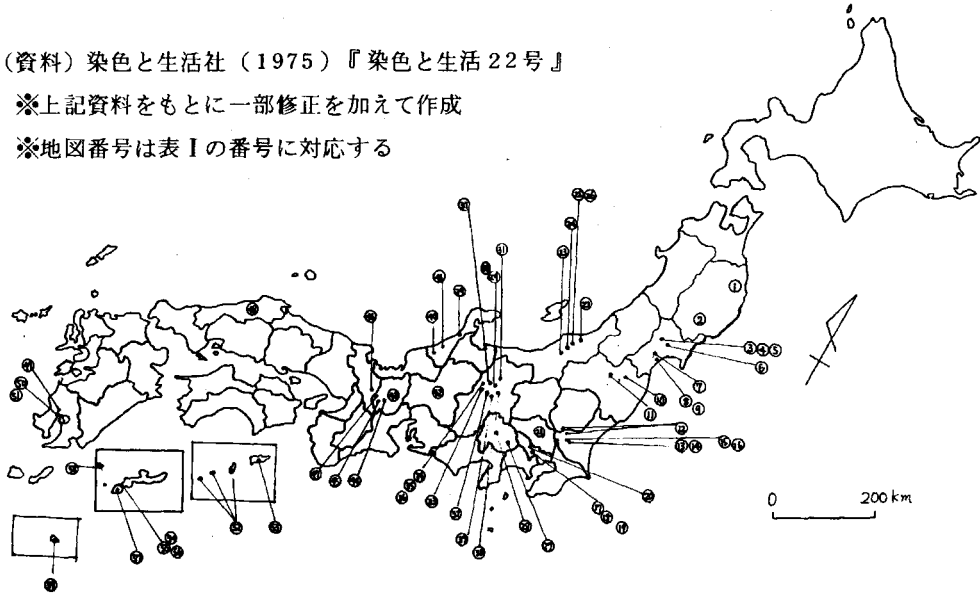
(染色と生活社『染色と生活22号』をもとに一部修正して作成)

図Ⅰ 日本の紬生産地（昭和50年3月現在）

（資料）染色と生活社（1975）『染色と生活22号』

※上記資料をもとに一部修正を加えて作成

※地図番号は表Ⅰの番号に対応する



表Ⅰ 紬生産額10位（昭和50年）

図Ⅱ 紬生産額（表Ⅰのグラフ化）

表Ⅰ 紬生産額10位（昭和50年）				図Ⅱ 紬生産額（表Ⅰのグラフ化）						
品目名	生産地	生産額	（生産額グラフ）							
1 大島紬	鹿児島	46,000	1000	2000	3000	4000	5000	6000	7000	8000
2 結城紬	茨城	7,500								
3 石下紬	茨城	4,200								
4 村山大島紬	東京	4,000								
5 小千谷紬	新潟	3,600								
6 信州紬	長野	3,500								
7 長井紬	山形	2,080								
8 塩沢紬	新潟	1,200								
9 久米島紬	沖縄	450								
10 南部紫根染紬	岩手	3								

資料：『日本の伝統産業（工芸編）』より作成
1976 生産企画調査会発行

摩郡瑞穂町及び武蔵村山市、そして結城市の概観をおこなった。その際、瑞穂町及び武蔵村山市をあわせて「村山地域」とし、それを比較するために結城市を「結城地域」として分析した。

両地域について、それぞれ、歴史、人口と産業、人口のコホート分析（コンピュータを使用）、交通と集落、土地利用の変遷（明治時代から現在まで）という項目に分けてまとめてみた。両地域とも、それぞれ変化はみられるが、村山地域の方が、都市化が急激に進んでおり、結城地域の方が都市化という面においてはかなり停滞的であることが明らかとなった。

第Ⅲ章では「村山産地」と題し、成立及び発展、生産・流通構造、東北地方への工場進出、生産の推移、月別生産反数の変化、袖従事者分布、地域区分について、それぞれ1節ずつ設け、統計資料と現地調査（聞き取り及び観察）をもとにして分析した。

第Ⅳ章では「結城産地」と題し第Ⅲ章と比較する目的があるため同様の節を設けて分析した。ただ、第Ⅲ章では東北地方への工場進出について調べたが、結城では、遠方への工場進出は行なわれていないためそのような項目は省いたが、この章では、石下袖と結城袖との関係、という1節を設けて、石下袖がいかに結城袖と深くかかわりを持つか、特に商品名の問題、買継商の問題について考察してみた。他の節は、第Ⅲ章と同様の節を設けて、それぞれ分析した。

第Ⅴ章では、いままでの章をうけて、両産地の比較考察をし、本論文の終章とした。両産地の比較を、最も簡潔に表わすと、表Ⅲのようになる。

結局、村山産地と結城産地との共通点は、表の中では③の項目のみであり、その他は相違点であり、さまざまな指標において異なった性格を有する袖産地であることがわかった。本稿では詳細に述べることを避けるが、両産地の袖産業を端的に表現するならば、村山産地は都市型地場産業、結城産地は農村型地場産業ということができよう。これが結論である。

表Ⅲ 村山産地と結城産地の比較

	村山産地	結城産地
① 源 流	・江戸時代	・古代
② 成 立	・大正8年	・江戸時代 (結城家18代秀康の時代)
③ 立 地 条 件	・養蚕地帯 ・農家の余剰労働力	・養蚕地帯 ・農家の余剰労働力
④ 原 料	・生糸	・つむぎ糸
⑤ 染 色	・板締染色	・くくりしばり
⑥ 織 機	・高橋式 ・平山式	・いざり機 ・高機
⑦ 買 継 商	・産地内には1軒のみ ・ほとんどが八王子へ	・産地内にすべて ・石下袖の50%も扱う

⑧ 生産高(最近10年)	・約12万反から約20万反へ	・約3万反前後を継続
⑨ 月別生産反数	・農業に影響されなくなっている	・農繁期に減少
⑩ 紬従事者分布	・村山産地内では限定 ・近隣市町村へ ・東北地方へ工場進出	・結城市内では全域 ・結城、小山以外にはほとんど広まらない

(筆者作成)

関東地方における神社信仰の地域性と重層性

小寺和代

1. 研究目的

本研究では、日本人の生活を支え続け、神社を中心として展開されてきた信仰生活、信仰行動を神社信仰と定義し、この神社信仰が関東地方においてどのように相互作用してきたか、および信仰の相互作用の結果であり、日本の宗教の特質とされる重層性は、地域住民の生活の上にどのように表出しているかの2点を明らかにすることが目的である。

2. 研究方法

歴史学、宗教学、民俗学等の研究成果を利用して、神社および神社信仰の発展について概説したうえで、関東各都県で編集された宗教法人名簿によって作成した神社分布図、神社分祀圏図を資料として、神社分布、分祀圏の相互関係について考察する。さらに、氷川神社分祀圏内の地域を調査し、宗教法人となっている神社、小祠、境内社、講の重層状態を考察した。

3. 神社信仰の地域性

関東地方においては、氷川神社、鹿島神社などのように地域的に分布する神社(図1)と、稻荷神社、八幡神社などのように全域に分布する神社(図2)とがある。

それらの神社の最も古い形は、自然神であったが、そこから発展してきたいくつかの神社は、次第に信仰圏を広めていった。自然神の信仰を保ち続けた山岳信仰の神社(武尊神社、榛名神社など)は、一般に、最初は山麓各地で祀られていたが、仏教の影響によって、山頂に奥宮、本宮といわれるものが建てられ、これが山麓神社の本社と崇められるようになった。本社の経済基盤がしっかりしており、御師のような信仰を伝播させる人が発生してきた神社では、山麓神社の範囲を越えて、より広い地域